

## 課程博士論文指導の実践研究

和崎 春日  
羽賀 祥二  
高橋 亨

名古屋大学大学院文学研究科  
名古屋大学大学院文学研究科  
名古屋大学大学院文学研究科

**司会：**本日は、大学院教育のFDの一環として、課程博士論文執筆指導の問題をとりあげます。というのも、ご承知のように、近年では修業年限内での学位論文完成こそ博士課程の実質化の第一の指標であるという指摘が、あちこちでなされるようになっていきます。一方で、私たちの身の回りを見ると、修業年限内で学位論文を完成させることのできる大学院生は、まだまだ少ないというのが実情です。そこで、今日は博士論

文指導に豊富な経験をお持ちの3人の先生方に、指導のあり方や問題点についてお話しいただくことにいたしました。これまで、このような話題について、教員が集まってフランクに話し合う機会はありませんでしたが、今日のワークショップが大学院教育をめぐる教員相互の恒常的な研鑽につながることを願っています。それでは、はじめに文化人類学・宗教学・日本思想史専門の和崎先生にお話しをいただきます。

**和崎：**ではまず私から話題提供ということで、15分くらいで気が付いたことを申し上げます。お配りした数字は平成18年の5月1日現在のものです<sup>\*</sup>。やはり3年次のダブリが、まさに課題の中心です。大学院が重点化されて枠が増えてきて、もちろん大学院生を採らなければいけないし、採ろうという意欲もあるのですが、やはり重要なのはアウトプットです。5、6名の博士課程後期枠に、仮に8名、10名入ってくるとしても、いわゆる高等研究機関に就職できるのは1、2名という状況が続く昨今です。あるいは博士論文を3年間で出せないの、どうしても3年次がその都度多くなってしまふ。

我々の研究室は本当に新参の研究室で、阿部先生に日本文学から転出していただいて、そちらとの協力関係はもちろんあるわけですが、今は阿部先生も含めて4人、嶋田先生、佐々木先生、和崎で構成しています。出発当初は当然、後期の人数がやや少なく、前期がやや多めでした。各年次5名、10名、8名、そのくらい採っていました。今は7年目ですが、設立当初はそれくらいで、非常に厚く採っていたという意識があります。ここ最近ではむしろ前期課程の受験者が細ってきて、後期課程受験者が増えてきているという傾向はあると思います。これは一種ジレンマとも言えると思いますが、前期課程に入ってきた人は、我々はインプティングが無いわけですが、意欲に燃えて入ってきますので我々も頑張る。すると、残りたい、勉強

し続けたいという学生が多くなるのです。博士後期課程に行きたい、という学生が多い。出来れば残りたい。両面にらみつつでも、やはり残りたい、と言う学生が多いです。それに応えていき、修士論文も良いのを書いたから、展望もいいから……としていくと、お互いの努力の結果として、余計に後期課程が太っていく傾向にあります。そこが、一方で定員数は逆なわけですから、一種の悩み状況ではあります。

今は、先生方も色々のご苦労されていると思います。やはり前期課程のリクルートに非常に苦しんでいるというところです。リクルーティングの講座を持っていませんので、学会に行ったときに声をかけたり、博士前期課程で発表している人を見ていたり、面白ければ声をかけるとか、そういうことをやっています。

資料の数字は1年間ずれていますが、今年はマスターが新たに6名入ってきています。その分ずれ込んで、後期課程3年生でもう出てしまっている人もいますので、大体27名とか28名です。今までの7年間で、博士号取得者が9名です。人数は入ってきているけれども、そして本人も頑張り、我々も協力しますが、やはり博士論文は、1学年7名も8名も入ってきて3名ずつくらい出るかというところではない。単純に割りますと、1年に一人ずつくらいしか出ていません。ですから、論文を書き上げるのは早くて4年ではないでしょうか。我々の教育努力がより必要と言うこともありますが、3年で目処が立って、4年で書けたら早い



ほうではないか。

しかも、博士取得者の中には、入学以前に業績をかなり溜め込んでいる人もいます。論文の抜刷が20もある、という人が入ってきているのです。つまり、大学に職を持っている人が入っている。そういうこともあるわけです。ここは社会人入学も認めていますから、職を持っていても可能です。だから、学位を取りたいという人、例えば私立大学に勤めている人が、学位を得るために博士課程に入ってくる場合があります。ただこれが、思いついたままに課題を申しあげますと、認定論文だけ提出していればよいという時代であれば、遠方の大学に勤めていてもいいでしょう。ある遠方の大学に勤めている方の場合、飛行機で毎月来るので、そのときに指導してディスカッションして、学位を取りました。この人も業績を30本くらい持っていました。やはり4年5年かかりました。単にまとめるだけ、と言うわけにはいかない面もあるし、4人の指導教員の論点のアスペクトによっても、ある先生は足りていると言っても、またある先生はまだまだと言う場合もありますから。分量として足りていても、博士論文として仕上げるのに早くて4年ではないでしょうか。別の方の場合も、当時ある大学の准教授で、相当程度の実績を持って入ってきています。

現在のように必修単位を課すことをどう考えるか、ということですが、授業に出ていることを厳格にカウントしながら単位認定して、博士論文を出さねばならないとすると、こういう遠隔地からの職業人が指導を受ける機会は減るであろうと。それではこういう人たちへのモチベーションを下げるでしょうし、また受験者が減る要因にもなるでしょう。比較人文に関しては、名古屋大学の博士課程は、遠くからでも、仕事を持っていても学べるという理由で、優秀な人材が集まってきたという現状があります。大阪からも東京からも沖縄からも来ていますし、大学教員に限らず、

薬剤師であったり東京で非常勤講師を勤めていたり、高校教師であったりと社会人学生の職種も多彩ですし、愛知県や中部3県在住者が多くはありますが、遠隔地からの方もいる。純粋にここで学位を取って研究職が決まっていた博士学位取得者も、3名が新たに大学に職を得ています。群馬の大学の職。地球環境研究所の研究員の職。宮崎公立大学の専任の職を得た方々は、ここで育てた人材です。逆に言えば、それ以外の人々は、すでに大学に職があって個々の専門論文をいくつか持っていて、ここへ来て纏め上げたという形になります。

リクルーティングに関して言えば、この大学院の位置づけをどのように考えていくのか検討する中で、比較人文ではこういう人達も育てたということ、このようなケースもあっていいことだと思っているのです。また実績としても評価されますから。おトクな育成方法と言うと何ですが、こういうことも一つのありかたとして、オプションは残しておくべきではないか、と言う気はしております。地域や扱うテーマによってはどうなのかな、というのがありますが、我々の認定論文が、どうしても長いフィールド・ワークを必要とすることも理解していただきたい。社会学ですとアンケート用紙に方法論をがちり組んでばっと短期に3ヶ月くらいでアンケート調査を使って分析して理論組みすることもできるでしょうが、人類学や民族学の場合はやはり時間がかかる。方法を最初から組むのではなくて、長い生活調査からモデルを帰納論的にせり上げるので、演繹的ではない分、どうしても認定論文を書くのに時間がかかります。それは非常に悩みではあります。ですから1年に1本ずつかけない人も多い。というのが悩みといえ悩みであります。なお、先日の教授会で、一人の主たる指導教授を前面に出さないという議論がありましたが、できる限り我々は指導教員4人全員を並べています。今の4人が共同指導するという形でも、実質的に主たる副たるというのは出ているわけですから、ご提案のようにしなくても済むのではないかと考えております。

**司会：**ありがとうございます。次に日本史学の羽賀先生にお願いします。

**羽賀：**私は、現状と主に気をつけてやっていることをお話できればと思います。重要なのが、やはり学位取得までの期間の問題です。これまでのケースを見ると、ほぼ6年かかっています。3年というケースは、やはり社会人で現職の大学教員をしていて、論文がすでにたくさんあるという方です。他の学生は5年6年

かかっている、学生に聞いても6年くらいかかることを前提として取り組んでいるのが実際のところですが、博士論文を書くときの原資になる論文ですが、全国誌に2本3本載せる事が前提になる、とは言っております。定評ある全国的な学術誌に掲載された雑誌論文を基にして、5年なり6年なりをかけて博士論文を作る、というのが一般的で、そういう指導をしています。社会人はなかなか学術雑誌に発表することが難しいこともあって、他の雑誌に掲載する例もあります。

もう一つは経済的な問題が非常に大事で、学生も自分の生活を支えるために頑張っているのですが、学振の研究員になることが、ここ数年非常に難しくなっています。2000年前後には毎年一人くらいは取れていましたが、私が担当している近代現代史を専攻している院生の数値を見ると、あまり取れていないという現状があります。奨学金については、ほぼ取れています。RAは最近あまりまわってきませんが、TAはやってもらっています。後期課程については、奨学金が充実する傾向にあるためか、勉強を続ける上では比較的経済的には恵まれている状況にあると思います。

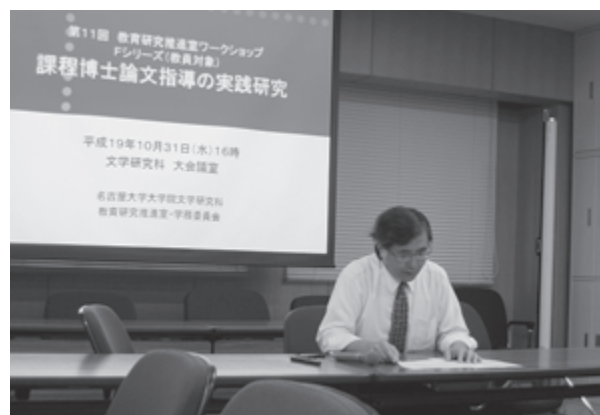
出口の問題ですが、すべての人が日本史の教員として職を得ることは出来ない状況ですが、半分以上は大学教員の職を得ています。助教が二人と准教授が二人、二人が非常勤講師。今後も1年に一人か二人のペースで博士論文を書いてくれると思いますが、そこに至るまでのプロセスが長いことがあり、そのために一応次の3点ほどを強く指導しております。一つは1年に1本全国誌に載せると脅迫的に言っています。全国誌に載せることは、院生の学問を広く学界に認知してもらうことでもあり、近くの学会誌や名古屋地区の研究会の雑誌等ではなくて、全国誌に出すことを奨励しています。投稿してすぐ載るわけではありませんので、まずは修士論文について全国学会で報告させています。全国学会の大会報告は無理ですので、学会の月例会あるいは夏のサマーセミナーや、小さな狭い範囲の学会などで修士論文を発表して、外の世界の意見を聞いてくることを義務付けています。修士論文を提出した人は、ほぼ毎年、春から夏にかけて研究発表をしています。またそれを踏まえて雑誌論文を作成することを、その後1年以上かけてやっているようです。投稿論文の水準は全国誌ですからかなり高く、掲載されるまでに時間がかかります。長いものでは2年くらいかかると思いますが、ただやはりこの壁が高い分、1本掲載されると毎年全国誌に掲載されるようになっていくようです。投稿前には色々話をしますが、「て

にをは」から直さなければいけない部分もあり、論文の構成が若さゆえにうまく作れないということがあります。文章の書き方と構成についてアドバイスするという形で、投稿前に何回か学生とのやり取りはしています。こういうことを段階的にやっていけば、学生も様々な条件をクリアできると思いますし、研究の範囲も少しずつ広げていけると考えています。

2点目は学術振興会の研究員として採用されることが研究条件を飛躍的に高めますので、何とか経済的余裕を作るためにも申請させてはいるのですが、やはりほとんどひっかからないのが現状です。ただ、申請書を作成するという作業がその後の研究生生活の基礎的な能力の一つになりますので、自らの研究内容を対象化したり、今後の研究内容を構築していくうえで、この作業をさせることを、一つの大きな指導の目標にしています。

3点目は具体的に作成の指導です。相手をする大学院生によって相当制約される面がありますが、基本的には原稿用紙400枚くらい。4、5本の論文で書かせるということ。そして自らのテーマについて、体系的に持論を作って自らの土俵をつくって、さらに今後研究生生活を続けていく上で、研究者としての基礎的な部分が作れるような体系性を持った論文を書くように、強く言っております。最後に、近代現代史学ですと、自治体史、県史や町史ということを将来依頼されることが考えられますので、院生の間に、博士論文とは直接に関係はなくても、学外での調査研究として自治体史の編纂を彼らの一つの仕事にしているのが現状です。とくに近代現代史は、発表されていない資料がたくさんあります。そういう資料の調査方法を習得させる中で、自らがテーマにしている研究に少しでも役立てるように、調査方法の習得を組み込んでいくことをやっております。

さらに、単にアルバイトとして資料整理とか目録作



成等の地域資料の調査をさせることを超えて、直接に自治体史の編纂に関わらせる。つまり編集作業と執筆をさせることで、学外における地域資料、調査方法を体験させることを目指しており、現職の院生についても自治体史編纂の執筆専門委員として関わってもらって、いずれ4、5年かかって自治体史を書くという方向付けをしております。そういう中で自らのテーマに即した貴重な資料が見つかることもありますし、どの資料が大事で、その資料を後世に残しておかなければいけないか、と言う判断が出来ますし、そういう意味で課程博士の指導の一環として、こういうことをやっております。以上です。

**司会：**ありがとうございました。それでは、最後に日本文学の高橋先生にお話いただきます。

**高橋：**一般的な資料を出しましたが、最初に日本文学・日本語学研究室の歴史を書いておきました。大学院生は今までに修士150名、博士80名、日本語学を含めて出しています。日本文学としては、課程博士を約20名、論文博士も約20名出しました。講座としては私と塩村先生と二人いて、それぞれ平安朝と江戸文学を専門としていますが、実際には留学生が大変多くて、近代や現代の文学であらゆるジャンルに渡っている対象を私たちが指導しなければいけない、という現状があります。中世文学に関しては阿部先生、近代文学は坪井先生とか、あるいは日本語学の講座とも連携して、このメンバーを含めて名古屋大学国語国文学会を結成しています。この学会で出している『名古屋大学国語国文学』は現在百号を編集中で、今まで年2回出していたのですが、諸般の事情で年1回に変更せざるを得なくなりました。現在は博士後期課程に11名いて、先の和崎先生のお話にもありましたが、実質的には4年以上いる人が半分くらいです。そこが問題ですが、博士論文を3年で書くことは現状では難しい。いかに伝統があり実績があっても教員二人で頑張らなければならず、関連講座との連携なくしては、実際には何も動かないところです。

3の教育方針は、学生や院生の主体的な研究を重んじるとありますが、これは伝統的に選ぶテーマも自由に行っているということです。例えば塩村先生や私が、入学の時に平安朝や近世文学ではないからという理由でお断りすることは、原則としていたしません。どんな分野であろうと、入学試験の成績と実績があれば入学を許可します。その代わり、基本的には自分で研究してください、となります。最近では、そういうふうには放っておいてはいけなくて、ある意味で手取り足取り

指導していかざるを得ません。しかしこちらの負担との関係で、時代的な分野としても、例えば古代や近代現代文学では非常勤講師に授業などをお願いしてきていたのですが、今回の非常勤講師の削減で教職員以外は使えなくなって、それで実質的に講座としては困っている。我々の授業では原本や初版本のコピーを用いて極めて伝統的でオーソドックスなことをやっていますが、近代現代文学では留学生や学部生の授業でもこうした授業をやっています。これは意図的にやっているもので、近代で古典の文献学的な知識とか注釈書を読むとか、そういうことを研究方法として身につけることが有効であると思いますので、そういうことをやっています。

4、博士の前期課程については、今までは通年授業でやっていましたが、今年から大学院も一気に半期授業にしました。半期授業にすることによって、半期でレポートを書かせることになって、学生の負担はかなり大きくなります。これが実質的には指導の面では有効になっていくだろうと思われまます。

学会や各地の研究会に積極的に参加するように指導しております。発表や投稿論文がありますが、査読があるので投稿してもはねられて載らないこともあります。具体例として、学会発表して投稿した学生が、毎回一人くらいずつ頑張ってやっていたのですが、ここ3年、全員投稿した論文がはねられている。ショックを受けました。私はたまたま編集委員なので内部事情が分かったのですが、12本の投稿論文をABCDに分けます。Aは採用、Bは条件付の採用、Cは不採用だがコメントあり、これは原則として再投稿を促す。Dはノーコメントで却下です。12本のうちAは1本。半数以上がC。それで皆が諦めてしまうことが分かったので、頑張って再投稿せよと励ましています。このままでは雑誌にならないと(笑)。審査の方法ですが、審査員は3人いて、一人でも悪い点をつけると、下に合わせる形を取っています。全員がAを付けることは原則としてまずあり得ない。そういう事情がわかって、ある時、掲載論文の本数が足りないから、締め切りを延ばして、臨時の編集委員会をやって、励ましたらぎりぎりの時点で5人が出しました。5人ともCでした。さらに学会のときに臨時の編集委員会をやるのが分かったので、そこへ2週間書き直して投稿せよ、と指示しました。再び5人出して、結局2人OKになりました。今までなら放っておいたのですが、そういう内部事情に接したせいもありまして、コメントを付けるという教育的配慮の部分がありますので、そ

れを生かして頑張るよう指導しています。私は個人的には投稿前に持ってきて、見てくださいと言われたものは見ますが、論旨がよほどひどかったり結論を間違っているのではなければ、私の意見と違う内容については極力コメントしません。論文の形式や表現について、感想や意見を言う程度です。ですから、外部からコメントを付けて返してもらうのは大変有り難く、その中で妥当だと思えるものは修正して出さない、と言っています。正直に言うのと審査委員によって色々ですから。外との関係によって、学ぶ点も多いと思います。

アルバイトなどは個人差がありますが、高校や大学の非常勤講師は、積極的に認めています。学術振興会の特別研究員については、去年は4人の推薦書を書きましたが、残念ながら一人も通らなかった。その前まではぽつぽつと年に一人くらいは通っていたのですけれどね。就職の方は、18年度は珍しく3人が大学に就職しました。ただし、そのうちの2人はすでに在籍はしてなくて、籍を抜いてから3年目くらいです。

**司会：**今日は「課程博士論文指導の実践研究」というタイトルで、先生方に話題提供をお願いしたのですが、その背景についてももう少し補足させていただきます。ご承知のように、最近では教育研究水準を維持向上させていくために、様々なGP等に応募していかなければなりません。ところが、例えば今回のグローバルCOEの申請書類などでも、どこの研究科でも共通して、とくに文系のところはそうですが、修了年限内の課程博士の欄に0が並ぶのです。これは書類として非常に体裁が悪いというか（苦笑）、そういう状況にあります。一方で、大学院教育改革プログラムなどでは、いかに修了年限内で課程博士を終わらせるかを問われている。我々は誰もが、それははじめから無理だと思っています。例えば日本史では5年6年かかるということでしたが、外国語の習得から始まる西洋史ではもっとかかります。ただ組織として文学研究科が前期課程2年、後期課程3年を公に掲げている以上は、やはりその旨に沿った結果が出ていなければ、批判を招くのは当然ではあります。その中でどういう方策がありうるのか。そもそも3年というのが無理なのだから、もちろん現実的に今すぐ可能だとは思いませんが、学部3年生から修士へ飛び級して、修士を3年にしてそこで基礎を作って、後期課程3年で書けるようにする。とか色々な方法がありうると思うのです。

在学者が1人ですが、実はある1人を指名して推薦して欲しいという依頼があったのですが、その人は他の大学からもオファーがあってそちらに行っていたので、関係したところで他に1人どうか……と。その際博士号をとることが条件であるというので、急遽博士号を取る指導をして、うまくいったという例外的なケースもありました。専任がなかなかいないので、大学とか高専で非常勤をやっている人が多いです。うちの場合には資料調査関係で、そこに学部生も参加して、そこが基礎的な研究教育の場になっています。また最近授業の場でも、院生が発表する形式の授業、また大学院生だけの授業で、私の専門に関わる平安朝文学と平安朝文学の最新の研究情報や文献の紹介も意図的に行っています。日本の文芸論は、院生に発表させる授業ですが、これは自分の研究の中間発表とは違って、むしろ理論的なこととかトピックを出して皆で討議することをやっています。今までのように放任と言うわけにはいきませんので、何とか頑張っています。

補足的なお話を聞かせていただきたいのは、すでに和崎先生から若干コメントがありましたが、何らかの形で改革の新しいアイデアを出していかないと、今の状況が続いてしまう。今は他大学の文学研究科でも、あまり状況は変わらないので、それほどこの点は突かれてきませんが、2年後3年後に様々なGP等に応募するときに、あるいは他所の機関はすでに手を打っている、と言う可能性は大いにあるのです。「魅力ある大学院教育」イニシアティブでは、すでに二つ実行していることがあります。一つはまず研究の前提となる調査を行う大学院生に、経済的な支援を行うこと。もう一つは、申請書類を書かせて、その部局あるいは専攻の中で競争的な資金の配分を行うこと。その二つを少なくとも、教育面では目玉としてやってきたわけですが、これから大学院教育改革支援プログラムに応募していくときに一体何を柱にしていくべきかが、喫緊の課題となっているのです。それぞれの先生から、私が個人的にお伺いしたいのは、どういう改革が考えられるか。逆に言えば非常にうまくいっていることも多々あると思うのですが、さらに制度面でこういうことが可能であれば、もっと指導が容易であるとか、その辺り、もしお考えのことがあったら、是非お伺いしたいと思います。制度面での制約はひとまず外して、どういうふうな支援する仕組みがあれば、少しでもよ

り優れた課程博士論文を学生に書かせることが出来るだろうか、その辺についてお考えのことがあれば、まず和崎先生からご教示頂きたいのですが。

**和崎：**優秀な人材を中部3県だけでなく、遠隔地から採ることではないでしょうか。今回は毎年きちんと授業に出るように制度が変わりましたから、遠隔地からは厳しくなりました。それまでは認定論文さえ書けば良かったのですが、もはや遠隔人材を指導することは厳しくなっています。だからそこからも良い人材を採ることに、何らかの方法が必要ではないか。例えば遠隔のソフトを使うとか。授業にきちんと出て、1年の演習をちゃんとやりなさいというのは、あまりにも厳しくなったなあという印象です。とはいっても、それがまた急にひっくり返ることもあるかもしれません。いずれにしても、遠隔地の優秀な人材を入れて、しかも授業での演習認定をやる。演習での認定ですから、様々なソフトを駆使して、物理的な接触頻度がフェース・トゥー・フェースでなくても、そういう人材に対して3年4年前と同様に認定論文を中心にディスカッションして育てていくことが出来たらな、と思います。名古屋大に、課程博士で入ってやりたいという人が周りに結構いるのです。遠隔地にいても名古屋大の課程博士で学ぶことは出来ますか、ということを実によく聞かれます。ですからそのときも論文博士ではなくて、課程博士に入ってください、と必ず言うようにしています。

**羽賀：**多分、我々も学生も頭が切り替わっていない。3年で出すという現状を、私も3プラス3くらいのところで考えていますので(苦笑)。だから6年で出してくださいよと、飲み会ではそんな話もしますが。その意識を変える必要があるだろうと思います。もう一つは、やはり出口の問題があります。3年で書いて、メリットがあるのかどうか。むしろ3年で出さなくていいよ、と言っているのです。つまり学振を取ったほうが、2年なり3年の経済的状況がものすごく良くなりますので、まず学振を取れと言います。ですから今後、博士論文を3年で出すという書類を作っていく必要は確かにあるのかもしれませんが、経済上の問題と制度上の問題とを考えた場合、なかなかというのが現状です。経済的支援ということ言えば、東大は後期課程の授業料を実質ゼロにするということで、僕もびっくりしましたが、やはり生活するにはアルバイトをしないと……。後期課程になると親との軋轢も非常に大きくなってきます。もう1年もう1年と依頼して、何度もごまかしながらという現状があって、今

年の学術奨励金みたいな制度があると、学生は非常にゆったりとして周りに目を向けて、学部生を指導しながらゆったりと自分の研究も出来る、非常に良い制度だと思えますが、こういう奨学金制度を大規模に広げて頂ければ、全体の学生の条件はよくなっていくのではないかと、思います。

**高橋：**私のところも論文博士の依頼が結構あって、正確には覚えていませんが、私が抱えて出した論文博士もかなりの数になります。今までは和崎先生みたいに、博士課程にどうぞとは言わなかったのですが(笑)、今も実は3、4人の打診があります。僕は、論文博士はかなりちゃんとしたものを書いてくれないと困るからと言って、厳しい条件を出しているのですが、そういう方に入ってもらう形は、遠隔地と和崎先生は仰ったけれども、実際には無理になってきている。そういうことは、実際的に可能性があるのでしょうか。

**司会：**それでは、後は自由な意見交換ということで……。

——今思いついたのですが、昔この便覧に「優秀な者は一年次に博士論文を出せる」と書いてあったんですよ。今も書いてあると思いますが。そうしたら、実績持っている人に入学してもらって、1年で出せばいいんですよ。3年いなくてもいいんですよ。ただ、それがまだ適用されていないでしょう。やろうとしたことはあった。議論に乗せ掛けたことはありました。事務レベルなら分かりませんが、それは非常に難しいというレスポンスがあって。そういう方に1年なり2年なりで出してもらおう。そういうこともちょっと思いつきました。

——それは数字の上ではいいのですが、ただやはり1年で出せたらまずい、と(笑)。博士後期課程が3年という組織ですから、やはり3年間かけて過不足なく……もちろんそれほどうまくいくわけではないと自分でも分かっていますが、でも求められているのが3年間という課程をもった教育機関であるのなら、2年でもなく4年でもなく3年で成果を出せ、ということになると思います。

——そうですが、それでも僕はさらに3年以内ということの意味を強く話したいと思っているのです。オックスフォードでも2年で論文を出してしまったというのも結構いますし。ケンブリッジでもそうですが、日本の場合、修士のときに結構業績がたまっている人がいるんです。修士で色々なことをして、かなりの実績を持っていて……。後期は3年の課程ですから3年

で出すのが一番ですけども。3年以内はそう多くはないでしょうから、そういうことの間口は広く残しておいて、1年で出せるであろうところを、ディスカッションを入れることで2年なり3年なり当然かかっていくでしょう。だからその間口はある程度残すような方向で考えていけたらいいかと、ちょっと考えました。

——ケンブリッジの場合は、結局2年が3年にカウントされるから、やはり3年は必要なんですね。修士の2年が、その3年のうちにプラスされていく。だからやはり3年は必要なのですが、私が考えていたのは、これが果たして可能なら、学生はむしろ喜ぶ人が出てきて、例えば哲学の場合には、ある年代の場合には学位を取らないまま出てしまった。ところが論文博士を取るにはハードルが高すぎる。それで実は私のところに打診があったのです。哲学を出ただけけれど、もう一回哲学に入って課程博士を取ることが出来るか。彼は、論文博士はレベルが低いように聞いたけれどもそうですかと聞くから、いや論文博士を取ろうと思ったら、今のあなたでは駄目ですよ、と言いました。では課程博士はどうですか、と聞くから、私はさてどうだろう。哲学を出て課程博士を取らなかった者が、もう一回哲学に入って課程博士を取れるのかどうか。聞いてみないと分からないね、と答えたら、教務とかに聞いてみてくれるといったのですが。同じ名古屋大学同士で、博士課程修了生で、もう一回チャレンジして、取れるものなら取りたい、と。今はもう学位がないと就職できませんし……。

——排除する理由はないよね。

——だからそれがOKの制度になれば……。

——数年前、京都大学では、そういう人のために1年間在籍すれば出せるようにした、と言う話を聞いたことがあります。もうどこかの大学の先生になっている、若い世代ですけども。課程博士を今の制度の中では出す資格はないのだけれども、特別に……。

——そういう希望を持っているオーバードクターはたくさんいると思いますね。ともかく就職できない。博士号がないと就職できない。しかし、課程博士論文を提出する機会も逸してしまった。

——ちなみにそのシステムについては、他大学でも作業していますので……。また、先ほどの人の例で、一度哲学を出たけれども、また同じところに入って取りたいというのは、何か禁止する規則でもあるのですか。

——事務が反論しているのは、何年か前に某大学で

修士を終えて、名古屋大学で哲学の博士課程後期に入りたいとって来た人がいるのですが、事務で聞いたら博士後期にはいきなりは入れないということです。そのとき博士の前期、つまり修士をもう一回やり直さない、と事務で言われたというのです（笑）。数年して、別の人が大学の修士を終えて、博士課程後期に入りたいとって来た人はすんなり入ってしまった。ですから、事務の人によって、あるいは思い込みがある人によって答えが違うのではないかと、という印象を受けましたので、もう一度同じ研究室に入ることを禁ずるような規則があるのかどうかを確認していただけたほうが良いと思うのです。

——それは正規の入学？

——そうです。それは正規のコースを経た人です……。そして、もう一回課程博士を取るチャンスがあったのに取れなかった。そして今はもうチャンスがない。だからもう一度、博士課程に入ることが、博士号を取ることに一番の近道ということになる。

——全体の流れとしては、もう論文博士を出さないようにしよう、という方向性になっていますよね。だから、そういう制度から言うと、敗者復活戦のようなシステムを作る、ということのほうが、今後のシステムとしては……。

——もしも、そういう制度が出来たら、OBにこういう制度が出来たと、送りますけれども。

——これから単位を増やそうとしている中で、ということですか。

——それは単位の出し方や、スクーリングの仕方を工夫すれば、クリアできるのではないのでしょうか。

——なるほど。やはり単位は取ってもらったほうが良いと……

——両立しないことには、ちょっと出来ない。

——例えば、発表形式の授業で、発表したら単位を認めてはどうでしょう。毎回出席しなくても良いから、とにかくそこで1回は発表してもらって皆からそこで批評を受ける。そういう形にすればいいわけですから。

——それで後期課程の授業料をなくしてやっていければいいのですが。

——大体、奨学金はほとんどもらえているのではないですか？ 3年間もらえるから、結局3年以上やっているので、そうするとアルバイトをせざるを得なくなって、それで忙しくなって……。というある種の悪循環があります。それから、今までは裏表やっていければいいみたいな前提があったけれども、私は最近

3年で書かなければいけないというふうに全体の方針が変わっているから、頑張って書きなさいとは指導しております。ただ現実にはやってくれるかな、というのはなかなか厳しいものがあります。だから4年目くらいの学生がかなり焦っています。

——だから、ちらほら顔は浮かぶのですよ。彼に呼びかけて、再チャレンジOKということになったら、少々の投資はしてもやるだろうな。今回は3年以内に出すだろう。卒業してから業績がいくつかありますからね。3年以内に多分博士号を取るだろうという人は、顔は浮かびます。

——もう私学では、再入学してもらって3年以内に書いたということで、堂々と3年以内に書いたと(笑)、そんな手を使っている大学が良い評価を受けて、真面目に書かせている大学が厳しい評価を受けるのは、悔しいですよ。

——これは質問ですが、その3年以内というのは、留学生もですか。実績にカウントされるから。

——留学生は意欲が高いので、それは頑張らせば、出来る。

——現状は留学生頼りですね(苦笑)。

——どことは言いませんが、ある文系の研究室の留学生が僕のところに相談にきました。ものすごく燃えていた人なのですが、1年のときにある研究計画を出したら、こんな立派なことをやっていたら3年で出せないよ、削りなさいと言われたそうです。これはエピソードとして聞いてください。そういうことも出てきている、と。そういうような矛盾がないような形で、ある水準を保ちながら、頑張るといことですね。

——今は話が課程博士論文を3年で書くということから、3年で書けそうな人を後期課程に入れるという(笑)感じになっていますけれど、それも確かにアイデアとしてはいいと思いますけれど、より重大な、深刻な問題は、学部から上がってくる学生をどうするかでしょう。かつ下に関して言えば、これはまた全く別な問題になりますが、定員充足の関係で、率直に言って前期課程の学生の学力が今後向上していくことはまず望めないだろう、ということです。その下からの学生のことも考えると、どうでしょうか。

一方で、卒業生がやってくるというのは、一つの刺激にはなると思います。やはりそれだけ年季が入っているから、色々。つまり下から入ってくる学生の能力が下がっている。すると、やはり上に引き上げる力がどうしてもないといけないから、そういう意味で年季の入った人の存在が活性化させるとは思います。

——下の学生の能力が下がったのは、要するに内部進学が少ないというのもあるのでしょうか。このところは一人ずつ入ってきて、少し希望が出てきたのですが。やはり外から来た人たちでやると、前期を2年でやって、その後ドクターに進んで、3年で書かせるのはかなり厳しいかなと思うけれども。うまく学部から優秀な人が進学してくれていれば、僕はやりようによって可能だと思います。今、やってくれるかなと希望を持てる人もいますけれども。授業のレポートや、学会のレポートをどんどんやらせることによって、それをマスターのときからやらせる。今までなんとなくマスターの試験で、学会誌に投稿するのは、なんとなく遠慮する風潮がありましたが、僕はもう最近では下克上を意図的にやれ、と言って、マスターでも学会にどんどん論文を投稿させています。学年の秩序はもう無視しろ、と。むしろそれを奨励しています。また半期授業になったので、レポートの書き方も出来るだけ論文スタイルで書け、と。そういうことをあまり今まではしなかったけれど、やっていけば、優秀な学生は乗っていけるかもしれないと思います。ただしこれは皆ができるわけではありませんが。

——ある先生の研究室では、学生の成績を壁に貼っているとか(笑)。

——たとえば、学会発表をやる順番は、学生たちの中で、先輩から先に、と言う序列意識があるのではないか。それで私は自分が関係している学会で、マスターの子に発表させたら、と言ったら、意外に皆がぎょっとした反応だったから、あ、そうなのかと思ったんですけども。だからそういうのをどうするか。あまり学生たちの調和を乱すようなことをやりすぎではないかと思いますが、でもある程度は下克上は必要ではないかと……。

——3年でという話は、5人くらい博士課程がいて、その5人全員を3年で出すことを優先しなさい、という話ですよ。正直な話、学会誌に投稿を2本載せるというレベルが高いですよ、そういう風に考えていくと。そこに手を加えないと、本当は3年で出しますというスタイルを作るのは難しいのではないかと。

——そこは、かねがね柔軟にとは、申し上げていますが。

——しかしそれでも理想を言えば、学会誌に2本載せるレベルを求めておいて、それを可能にする支援方法を考えたいのですよ。非常に難しいけれども、その経費を申請するということになりますから。



——結局、学費を取って商売しているからには、3年間で取れるようにしなさい、というわけでしょう。すると、その子なりに一所懸命やったら、3年間で取れるという形にしてあげないとおかしいですよ、という話なのだから、これは少し下げられないかな、ということですよ。

——その論理も分かりますし、結局私もそうですが、学生を見ていても、やはり何かしなければいけないという目標がないと怠けてしまう。学会発表はやはり、その目標になる。だから、あるほうが彼らも頑張りがやすい。とくに、同じドクターに入っても、頑張った人は1年目にここで、2年目にここで、と一つずつ評価される。同期で怠けていると、評価されるものが無いからやはり頑張るようになる。良い学生が入ってどんどんやっていくと、自然と他の学生も負けじと頑張るところがあります。本当に一人でも良い学生が入ると、ガラッと変わるところがあります。

——学会発表に関して、資金援助はしていますか。

——今は無理ですよ。院生のほうから資金援助をしてくれ、という要望がきますが、今はその制度がないので、現状は出せませんと答えるしかないのですが。

——理系では学術雑誌への投稿の投稿料金が結構高いらしいのですが、それは講座費から出るそうです。

——もう法人化されましたから、一旦決めれば実行できるのですが、ただ予算がないと難しいことは難しい……

——でも学会発表くらいは出せてもいいですよ。

——指導の一環として書かせるのですよね、講座から出してやるとかいうのは……。

——だから単なる学会発表ではなくて、それが指導の仕組みの中に組み込まれているという根拠があれば、もっといいと思います。当然申請できると思うのですが。

——ええ。ただ今は申請出来ませんよね。学生が出張するとかは、出ないことになっているので、今の制度では駄目だと思いますが……。

——おそらくそれを出張扱いにするから駄目なんです。出張ではない……実態は出張に近いけれども、旅費計算のないものにすれば、不可能ではないと思う。あるいはそういうプログラムを申請してお金を融通するとか。

——ただ色々面倒でしょうから、簡単に出来るシステムがあれば一番いいと思います。

——ともかく旅費は駄目なのです。我々のプログラムでも、学生が調査に行くのに必要とする費用は事業費であって旅費ではない、と言う論理でやっていますので、旅費は全く計上していません、学生については。まあ、ほとんど会計処理の技術的な問題ですね。

**司会：**さて、今日は三人の先生方のお話を緒にして、思いがけなく踏み込んだ本音ベースの議論ができたように思います。全学レベルでも、博士課程の指導体制については色々検討が進められているようですので、我々としても「人文学フィールドワーカー養成プログラム」を突破口として、ぜひとも博士論文指導のあり方を継続的に改善していきたいと考えています。今日はどうもありがとうございました。

\* 配布資料は、個人情報を含むため掲載していない。